

## 大平さんの政治観と人間像

牛尾 治朗

### 「青藍会」での印象に残る発言

一九七一年一〇月、グレラン製菓の柳澤昭さんや中部ガスの神野信郎さん達がそれぞれ大平さんと親しく、青年会議所メンバーで大平さんの会をつくるうという話になり、当時築地にあった「藍亭」で会合を始めることになった。初めての会合の時、「青年が藍亭で集まる」ということから「青藍会」と名づけられた。青藍会は、その後有名な「青嵐会」ができて、いささか肩身の狭い思いをしたが、年に三丁四回の会合は続いた。

大平さんが通産大臣の時に「アメリカから厳しく市場開放を迫られて『自動車の自由化はいつやるんだ、資本の自由化はいつやるんだ』と問い詰められたから、『一九七〇年には必ず万博はやる』と答えたら、向こうは笑って諦めて帰ってくれましたよ。」というおとぼけのうまい人だった。外務大臣の時は「日本人にはネイルやナセルのような、世界を手玉にとつて外交の檣舞台でスターになれるような人物は簡単に出てきませんよ。特に私のような平凡な外務大臣の時は何もできないけれども、皆が議論して皆で決めた約束だけはどんなことがあってもきちんを守る。そういう信頼を売り物にしたいものです。」と言っておられたことが印象に残る。「一利ヲ興ス八一害ヲ除クニシカス 一事ヲ生ヤス八一事ヲ減ラスニシカ

ズ」「淡ニシテ事ヲ成シ 甘ニシテ事ヲ毀ス」といった人生観を持った、しみじみとした指導者であつた。

一九七〇年代前半、二回ばかり私に参議院に立候補しないかという話があつた。家族や友人の反対の中で、念のために大平さんの家を訪問すると、「牛尾君、政治家になるのはおやめなさい。君のように多くの文化人や学者と人間関係を持ち、政治家の友人も多い経営者は、そのまま経営者としてお国のために尽くすことが一番素晴らしいことです。私は一〇〇%反対です」と、温厚な大平さんにしてはきつぱりと反対されて、非常に納得したものである。

田中角栄総理大臣の時の日中国交回復の前後は、あのひょうひょうとした大平外務大臣も、さすがに興奮していらしたようである。安岡正篤さんが「周恩来が田中総理に贈ったとされる書『言必信 行必果』は、俗僚の才について述べた論語の中の言葉です。これを大平君がついていながら見抜けないようではダメです」と言われたことを申し述べると、「いやあ、参りましたなあ」と、本当に参つていらした様子だつた。

青藍会の席でもしばしば「田中角栄さんとは一線を画さないと、大衆からは総理としての清潔さに疑問を持たれるのではないでしょうか」という素朴な質問から、「なぜ田中さんとそんなに仲が良いのか」という、立ち入った質問まで色々あつても、「いやあ昔からの長い付き合いだから」とニコニコされるだけであつたが、その日のサイン帳の冒頭に「俠気惜しむべからず」と書いて歸られた時に、これが言いたかつたんだなあ、私も思つた。

一九七六年、大平さんが福田内閣の幹事長としてご活躍の頃、官房長官だつた安倍晋太郎さんと深夜に及んでしみじみと話をしたことがある。その時「実は僕が一番尊敬しているのは大平さんという政治家なんだよ。その人と幹事長、官房長官という立場で一緒に仕事ができることが嬉しい。本当に色々教えら

れることが多い」とつぶやかれたことを覚えている。その安倍さんの長男と私の娘が互いに惹かれ合って、結婚する次第になるが、お互いにしみじみと共鳴し、友情を感じたのはこの夜のひとときであった。

一九七七年の暮れ頃だったろうか、幹事長としての大平さんと、佐藤誠三郎さんや香山健一さん等、社会工學研究所に集まる学者とで議論をしたことがある。学問に対して謙虚な態度を持つ大平さんに、若い学者達がとても感激をして、これからもこういう議論を続けたい、これからも喜んで協力をしたいという雰囲気になった。その後、大平さんの所へ行って、「大平さん、総理大臣になることが目的ではありません。総理大臣になって何をしようとするのか、何がやりたいのかということをはっきり持つ人が、これからの総理になって欲しいと思います」という話を生意気にもしたところ、「それは尤もだ。この間の先生達と一緒に議論をして、何か纏めて貰えないか」ということになり、一九七七年の五月頃から六か月にわたる勉強会を始めた。

大平さんの総裁候補の政策綱領は今、読み返しても若々しい、やや青臭い、ちょっと普通の政治家なら照れ臭くて出せない代物であるが、当時四〇代の人達が集まってつくった労作を、殆ど大筋として自分の政策として取り上げる、太っ腹な指導者だった。その時に簡素な政府とか、田園都市国家とか、文化国家とか、環太平洋構想とかいろんな議論が出て、それが総理になられてからの九つの政策研究会になるわけである。当時我々は、自分達の考えが優れているから採用されていると、自惚れている節もあった。読み返すと確かに新鮮な断面があるとはいうものの、若い芽を摘まないため、若い人の力を入れるために、あの青臭さをそのまま取り上げた、学問や若者に対する度量と敬意の大きさは頭が下がるものがある。それが一〇〇名近い民間の人達が政策に参加する新しい流れをつくった。当時の秘書官グループ、森田一さん、通産省出身の福川伸次さん、外務省出身の佐藤嘉恭さん、大蔵省出身の長富祐一郎さん等の協力も大きい。

## 幻の東京都知事候補劇の真相

一九七八年、大平総理が誕生したクリスマスの確か前日だったと思う、浅利慶太さんや香山さんと一緒に大平私邸でかなりの懇談をした時の話である。「牛尾君、一九七九年の東京都知事選挙の候補になってみませんか」と言われた。実は、この年の九月に新自由クラブの河野洋平代表から「我が党は牛尾治朗氏を候補にしたい」と一方的に打ち上げられて、私は大変当惑をして、新聞記者の方に「そういうつもりは無い」と全面否定をしてヨーロッパに旅に出たといういきさつがある。また、前述したように政治家になることに最も強く反対をした大平さんだけに、「今、大きな時代の変わり目です。東京都知事のような政治指導者を新しい人間に変えることが、日本の政治を変えることになり、また、その進む方向の一番解り易い、都民に対する問題提起だと思えます。だから私は色々考えた上でそれを申し上げているんです。」という申し入れにはいささか驚いた。私が「これはそんな簡単なことではありません。大平さんのお話ですから一回ゆっくり考えさせて下さい」と申し上げたら、大平さんは、浅利さんや香山さんの方に向いて「神輿の是非は私が決めますから、あなた方は神輿をどのように担いで、どのようにうまく運ぶかということを検討して下さい。これは重要な検討事項です」とおっしゃった。私は秘書官の森田さんに「こういうことは慎重に注意深く、そして緻密に運ばなければ危険です。もうしばらく皆で議論しましょう」と申し上げたら、森田秘書官も全く同意見で、検討事項ということで一息入れたが、再度、浅利さんや香山さんに神輿の担ぎ方、どこへ担いで行くかということだけは、十分検討しておいて欲しいという、大平さんの話であった。

政治の世界では、こういう雰囲気はすぐに漏れて、クリスマス過ぎから年末にかけて、「大平総理 牛尾氏擁立」という記事が出るし、河野さんの「それは本来、我々の候補だ」という全面賛成の記事も出た。

マスコミ攻撃にいささが辞易していた新年早々、大平さんから面会を求められて、「牛尾君、なかなか情勢は複雑だよ。こういう新しい考え方を進める時には相当な抵抗がある。かなりの中傷にあなたも相当傷つくかもしれないが、その覚悟でやってくれますかね」というお話であったが、私は、まだ正式な候補になつてゐるわけではないし、全く私的な打診の段階であつたので、お断りしたい旨を大平さんに伝えた。ただその時に、このことは一番走つてゐる河野さんに前もつて話してからやめないと、恥をかかせることになるから、河野さん、浅利さん、香山さんにそれぞれ了解を取つて、そこで正式に牛尾は出ないということを確認にしたいと返事を申し上げたが、そのことが問題を混乱させた大きな原因になつた。はっきり「私は出ない」という前に、一丁三の人に了解を取るといふことは、この世界ではやる気が十分あるといふことになるようであつた。

一週間で大体皆さんに理解をして貰えたので、確かヘルスチェックのために虎の門病院に入院中の大平さんを、一月の二三日に訪問をして、「一日も早く、この話は無いといふことを明確にしたい。」と申し上げた。かなり情報が広まつてしまつてゐるので、一五日に官邸で正式に断つて欲しいといふことになつて、その一日前に「新自由クラブ 河野洋平氏、牛尾擁立断念」といふことを発表することにした。大平さんは「河野さんの擁立断念よりも早く君がやめるといつた方が、君は傷つかないんだがな」と心配下さり、後で先輩の中山素平さんからも「あそこはもたもたしてたよ」と叱られたが、それは私の河野さんに対する友情であつた。一二月二三丁二四日から一月一五日まで、約三週間にわたる幻の都知事候補劇はそれで消えたわけである。

その間、田中六助さんや森田さんが、殆どのことに立ち合つてくれて、また浅利さんや香山さんが本当に心細やかにバックアップしてくれた、人間関係の暖かさというものは忘れられない。また、この前後に松下幸之助さんや石川六郎さんにも色々と相談に乗つて貰つたことを、今懐しく思う。

この年の三月頃から大平さんに対しては、一定の距離を置いて、経営者として助言をするという立場を続けることにした。九つの政策研究会が発足することが決まり、座長と幹事が決まったので、のべ一〇〇人の経営者や文化人や学者やジャーナリストが政権スタッフに参加したという、日本では珍しい政策協調が実現したのであるが、そのグループに私は入らなかつた。渦中にいないで外から九つの研究会に助言をするという立場を続けたかつたからである。

一九八〇年の四〇日抗争の時も、大平さんが出処進退にとても悩まれている時、率直な議論を展開したことを覚えている。「こつこつという時にリーダーというものは、人間関係の流れの中で自分の進退を考えるのではなく、ここまで皆が協力してできた多くの政策を、今後どういう風にして進めていくのか、政策本位で自分の進退を考えるべきである」と申し上げたら、大変に明るい顔で「それも尤もだな」とおっしゃったことを覚えている。

### つくば科学技術博覧会決定の舞台裏

土光敏夫さんと一九七八年から科学技術博覧会の準備作業をしていた頃、博覧会というお祭り騒ぎにお金を使うというのは、古い時代に青春期を送った大平さんにはもつたいたいという感覚があつて、お金を使うなら、治山・治水に使いたいという発想の方だから、なかなか噛み合わなかつた。しかし、この話は福田内閣の時から政府が博覧会推進協議会をつくつて始まつた話であるから、その会長の土光さんは「政府がきちんと予算を決めてくれないと、やりようがないじゃないか」とおっしゃり、協議会発足時から、内閣は一〇〇〇億円規模の予算決定をするという話であつたのに、大平内閣はなかなか具体的に科学技術博覧会の開催を正式決定しない。

こつこつという段階で、土光さんと一緒に総理を督促する意味で大平さんを訪問した。ところが二人は世間話

や一般論ばかりで、全然、博覧会の話が出ない。二〇分もして、土光さんが「じゃあ牛尾君、帰ろうか」と立ち上がり、玄関まで行った時、大平さんが「博覧会のことはお願いしますよ」とおっしゃった。土光さんは「ああ、やれとおっしゃるなら総理のご要望の範囲の中できちんとやります。どのくらいでやるかはあなたが決めて下さい」と言って帰られた。後日、大平さんに会うと、「いやあ、土光さんには参ったよ、土光さんの方から何か博覧会についてのご依頼があれば、今は予算が厳しくて何とか規模を小さくできませんかね」と言おうと思っていたら、最後までおっしゃらないので結局、私が頼む羽目になってしまった。今、頼まないで次の機会にと一瞬思ったが、やはりこういう時は後輩が折れなければいけない。しかし土光さんは大したもんだよ」と感心された。そして、当初の計画どおりの予算をつけて、土光さんをお願いするという形になった。

私は科学技術博覧会の基本構想委員長として、前半の計画を取り纏めることになり、さらにその後、土光さんの第二次臨時行政調査会をお手伝いするようになった。大平さんが亡くなられた時も、三回目のパリーで世界博覧会協会の理事会に出席していた。最終的につくば科学技術博覧会が正式に認知、決定されたその夜、突然の訃報に接し翌日の朝帰国して、お通夜に間に合ったという悲しい思い出がある。

大平さんの総理時代は、いわゆる第二次オイルショックの余波で、東京サミットの時も石油をめぐる消費見通しで大混乱、日本を除いたアメリカ、ヨーロッパ各国がフランス大使館に集まるという大変な場面もあった。この一九七九年の東京サミットの頃から、大平さんは将来のエネルギー政策、外交政策のあり方、国の安全保障等、日本の前途を考えて夜も眠れない日が続いたようである。「牛尾君、昨日も朝の五時まで眠れんどのう」と口にされるが多かった。これほど国の運命をものに背負って、ひたすらに悩み続けた最高指導者の責任感を目の当たりにして、切ない思いをしたものである。「大平さん、導眠剤を飲みましようよ。僕はアメリカに行くよ、最初の四、五日はずっと導眠剤を飲んで寝るし、帰国した

時も二、三日も飲んで寝るんですよ。行ったり来たりする時は、一か月間飲み続けることもありませんが、最近の導眠剤は後を引きませんよ」と申し上げると、「導眠剤？ 睡眠剤は体に悪いし、癖になる。必ずしばらくすると後遺症が出る。これを飲んではいかん」とおっしゃった。私も癩にさわったから、「もうその年になれば一〇年経って後遺症が出てもいいじゃないですか。今ぐっすり眠って、すっきりして在任中に良い仕事をするのが大切ですよ」と言っていると、「それは尤もな話だ」とニコニコ笑われたが、結局は亡くなられるまで導眠剤は使われなかったようだ。こういう律儀な昔気質のところがあったが、この真摯な責任感が心筋梗塞、循環器障害の引き金になったのかもしれない。

大平さんの様々なお話の中で、色々な言葉を学んだ。三分の一位は大平さんの造語だということが後で解ったが、とにかく一貫して「常」であり、「淡」であり、「愚」であり、「寛」であった。「至人只是常真味只是淡」「素ニ在リテ贅ヲ知ル」は、私の好きな大平語録のひとつである。

政治家、明治生まれ、農村出身と経営者、昭和生まれ、ビジネス出身と、大平さんと私は環境がことごとく違つのに、何故か私は大平さんとは多くの側面でも解り合えた。年齢には大きな差があったが、若い友人であり続けたことを誇りに思う。政治家でありながら、政治家以外の人と共通の感性、共通の笑い、共通の怒りを共有できる政治家は、なかなかいないだろう。大平さんとの出会いは、私の人生を本当に豊かなものにした。

面影の静かに浮かぶ寒さかな（草城）

（ウシオ電機会長）